

癒しの楽園南インドの旅

インドと言えば「カレーの本場」「一年中暑い所」「人口約12億人で近々世界一になる国」「2ケタの九九を学ぶIT大国」などをイメージしますが、南インドのベンガルールからやって来た友人（同僚）から「ケーララはいい所ですよ」と言われていたので、念願の南インドツアーに出かけることにしました。

パンフレットを見ると「癒しの楽園」と書かれてあったので、「本当に癒されるのかな？」と思いつつ、インドの乾季で、それほど酷暑にならないと言われている1月を選んで旅をしてきました。



1日目 旅の初めに

11:30 成田発。空路エア・インディア直行便でデリーへ。エア・インディアは1932年「タタ航空」として設立され、2007年には「インディアン航空」と合併して「インド国有航空会社」になっています。

エア・インディア AI03073 / ボーイング 787-8 で約10時間のフライトを楽しみ、18:00にインディラ・ガンディー国際空港に到着しました。

空港ではさっそく象のお迎えを受けました。



日本とインドの時差は3時間半ですが中途半端ですね。昔はムンバイ（旧ボンベイ）とコルカタ（旧カルカッタ）にそれぞれ標準時があり、これを統一する時に妥協で30分が発生したそうですが・・・これがインド流なんではないでしょうか。

デリーはインドの首都で北部に位置し、人口は約1700万人で商業・工業・政治の中心地です。以前は首都ニューデリーと呼ばれていましたが、今はデリーと呼ばれ、古くの町はオールドデリー、イギリス統治下に新しい首府として建設された地域がニューデリーです。デリーは予想通り排気ガスで曇っていました。

2日目 チェンナイへ

04:15ホテルを出発してインディラ・ガンディー国際空港からAI0439 / エアバス A320 で約3時間のフライトの後、直距離約1700km南東のチェンナイ（旧マドラス）に到着しました。この距離は札幌～鹿児島くらいの距離になります。機内から見る太陽は雄大なインド大陸を感じさせてくれました。



◎ チェンナイ・マリーナビーチ

南インドは北インドに比べて、穏やかな人柄で押し売りや客引きが少なく、ベジタリアンが多く、北に比べるとカレーもマイルド、緑が多く自然も豊かだと言われています。

チェンナイはベンガル湾に面した都市でタミルナドゥ州の州都です。1638年にイギリスの東インド会社がここに設置されて以来、今も近代都市として発展を続けています。

まずマリーナビーチに出かけました。



漁師はアパートに住んでいてリッチだそうです。

露店の魚市場が並んでいました。



そう大きな魚はいないようですが、太刀魚やカレイや小魚が売られていました。



果物・野菜の店が並んでいます。



市民のバイタリティーを感じます。



チェンナイは南インドの玄関口ですが、南インドに住む住民の多くはドラヴィタ系だと言われています。

ドラヴィタ系の人々は、一般的には北部のアーリア系の人と比べて色黒で背が低い人が多く、彼らはもともとインドの先住民でしたが、紀元前から続いたアーリア系民族の度重なるインドへの侵入により、南へと追いやられたのだそうです

◎ カパレーシュワラ寺院

カパレーシュワラ寺院は、高さ40mの荘厳な塔門をもつチェンナイで最大のヒンドゥー教寺院です。

シヴァ神がカパレーシュワラ神として、また奥さんのパールヴァティー女神がカルパガンバル女神として祀られています。



参道ではお参りのための花が売られています。牛もノンビリ寝そべっています。



壁面には賑やかに人形の像が飾られています。

色鮮やかな彫刻は12年に一度ペンキを塗りなおし、完了した時には大規模なお祭りが行われるそうです。



インドでの各宗教徒の割合は、ヒンドゥー教徒約80%、イスラム教徒約15%、その他キリスト教、シク教、仏教、ジャイナ教などを合わせて約5%となっており、圧倒的にヒンドゥー教徒が多いと言えます。

もっとも、イスラム教徒はインドがイギリスから独立した後、分離独立してパキスタンとバングラデシュに住むようになっていきますね。

14:00 少し早いですが、早朝出発したことでもあり今日の観光は終了して、ザ・レジデンシー・ホテルに到着しました。

ホテルの窓から見たチェンナイ市内の様子です。

翌朝、ホテルの朝食で焼き立てのワッフルが大変美味しかったです。



3日目 《カーンチープラム》

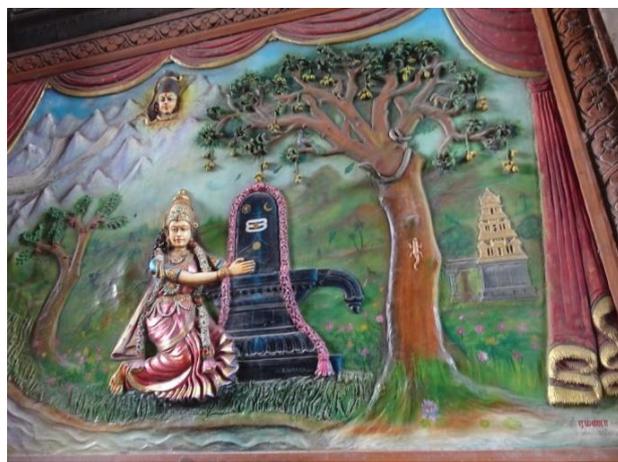
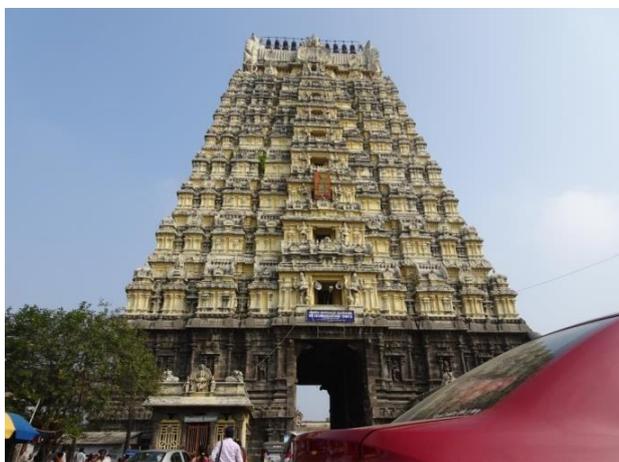
チェンナイから約2時間バスで移動して寺院都市カーンチープラムへ。

カーンチープラムは7～8世紀頃パッラヴァ朝の首都であり、数多くのヒンドゥー教寺院が建立されて現在に続いています。

◎ エーカンバラナータル寺院

シヴァ神を祀る寺院でシヴァ教の五大聖地のうちのひとつに数えられています。

塔門は約60mあり、この寺院は16～17世紀に建てられ、カーンチープラムで最大だそうです。



エーカンバラナータル寺院はマンゴーの木の神の寺院という意味だそうです、本堂の一角には樹齢3500年といわれるマンゴーの木があり、ヒンドゥー教の神、シヴァとカーマークシ女神はこの木の下で結婚したと伝えられています。

このマンゴーの木に願うと、カーストの身分差や宗教の違いも越えて意中の人と結ばれると言われているそうです。



遠足の生徒さん達や巡礼の人達が大変人なっっこいですね。



◎ カイラーサナータ寺院

8世紀初頭に造られたといわれる世界遺産の寺院で、本堂にはシヴァ神が祀られています。その周りには僧が瞑想するための小さな祠洞やパッラヴィ王のシンボルであるライオンの彫刻が見られます。

カイラーサナータというのはシヴァ神がチベットの聖なる山カイラー山で瞑想したことからそれに模して造られた寺院だそうです。



シヴァ神が思い切り足を上げたヨガのポーズを取ったところ、奥さんが恥ずかしくてあきれているという彫刻がありました。

このお寺は子供たちに性教育をするのにいいそうです。



《マハーバリプラム》

約1時間30分かけてマハーバリプラムへ。

昼食は現地のレストランでカレーの定食を食べましたが、辛すぎずまあまあ楽に食べられました。



町中は活気に溢れていました。



ベンガル湾に臨むマハーバリプラムはのんびりしたリゾート地ですが、6世紀以降パッラヴァ朝における東西貿易の一大拠点として栄え、町には数多くのヒンドゥー教寺院が建立された所です。ここの建築群は世界遺産になっています。

◎ 海岸寺院

8世紀にパッラヴァ朝によって作られたヒンドゥー教の寺院ですが参道には多くの巡礼者が訪れ、ダンス大会に参加する娘さん達がりハーサルをしていました。



この寺院は海岸の浅瀬に建てられており、2003年にモルジブを震源とする大地震の時には20mを越す津波に遭いましたが倒壊しなかったそうです。



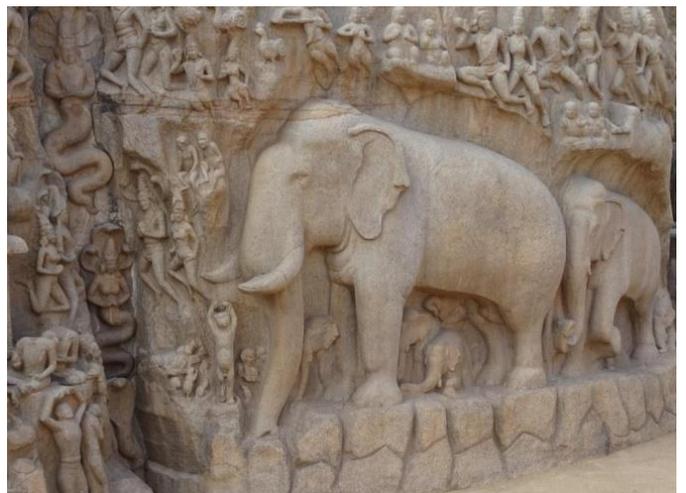
◎ アルジュナの苦行

インドの叙事詩『マハーバーラタ』の一場面を描かれた幅29m、高さ13mの一枚岩に掘られた巨大な彫刻で、7世紀に作られたそうです。

『マハーバーラタ』はヒンドゥー教の聖典のうちで『ラーマーヤナ』とともに重視されるもので、「バラタ族の物語」という意味だそうで、人類が増え過ぎて大地の女神がその重みに耐えられなくなったことを発端に起こった大戦争の物語だそうです。



やせ細って空を支えているアルジュナや、象の前で一緒に苦行をする猿も彫刻されています。



インド神話にはブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三大神が登場します。

ブラフマーは世界の創造者ですが、他の二大神に比べるとなぜか人気がないそうです。

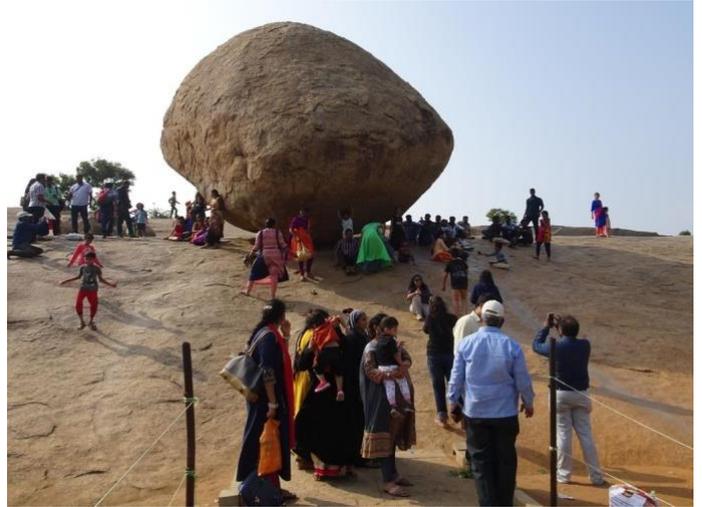
ヴィシュヌは世界を維持する神で、アヴァターラと呼ばれる10の違った姿で地上に現れます。

シヴァは破壊をつかさどる神様で、世界に終わりが来たときに世界を破壊して、また循環してくれるそうです。

◎ クリシュナのバターボール

クリシュナの好物のバターボールに似た石で、落ちそうで落ちない不思議な巨大岩です。危なくないのでしょうか？

クリシュナはヴィシュヌの化身の一つで、大変もてる神で15000人の彼女がいたそうです。



約1時間半をかけてチェンナイへ帰り、19:05 AI9551 / ATR72-6000 (プロペラ機) でマドゥライへ。

20:35 マドゥライに到着し、ジャーマナス・マドゥライ・ホテルに宿泊しました。



4日目 マドゥライ

マドゥライはタミルナードゥ州マドゥライ県の県庁所在地で、ヴァイハイ川の河岸に発達した古都で人口100万人の都市です。マドゥライは南インド随一の聖地とされています。

朝食前にホテルの近くを散歩していると、二人の女性が近づいてきて「写真を撮ってください」と言われて撮ってあげました。美人ですねと褒めると喜んでいました。モデル料は請求されませんでした。

その後、ホテルで朝食にオムレツを作ってもらいました。いい味でした。



丁度、朝市が立っていました。



このサトウキビは祭りで使うようです。



◎ ミナークシー寺院

南インド最大の寺院で、16世紀に領主ナーヤルが統治していた時に大部分が完成しました。巨大な塔は60mもあり、南インドを代表するドラビダ建築の寺院で、タミル人の心の拠り所となっているそうです。

寺の前にシヴァ神が乗る牛の「ナンディ」がいました。黒い制服の人達は各地のお寺からの巡礼者です。



ミナークシー寺院への巡礼者数は世界で2位だそうで、参道の賑わいもすごいものです。宗教儀式のためカメラの持ち込みが禁止されているため、絵葉書から写真を借用しました。



魚の目を持つという土着の女神ミナークシー（パールバァティー）はスンダレーシュワラ（シヴァ）の奥さんで、その子ガネーシャ（象の顔をした神様）とともに祀られています。土産物屋にシヴァとミナークシーの合体した像のイミテーションが飾られていました。左半身がシヴァで右半身がミナークシーです。（右半身にのみおっぱいが付いています）



◎ ガンディー博物館

インド独立の父、マハトマ（偉大なる魂）ガンディーはインド北西部のグジャラート州の生まれですがインドに5か所博物館があるそうです。



ガンディーは裕福な家庭に育ちロンドンに留学して弁護士となり、南アフリカで商社の弁護士として20年間つとめていましたが、そこで白人によるインド人差別を痛感して、暴力を用いずに相手に不当と悟らせようとする非暴力運動を起こしました。



困難の末、非暴力で独立を勝ち取りましたが、1948年に暗殺され、その時に着ていた血に染まったドーティー（腰布）が展示されていました。

ガンディーはカースト以下の不可触民（アンタッチャブル）の解放にも尽力したということでした。



《カーニャクマリ（コモリン岬）》

午後、バスで約6時間半をかけてインド最南端タミルナードゥ州のカーニャクマリへ移動。

トイレ休憩中に尖った山を写してみました。この付近の山では花崗岩などが採れます。

インドの風力発電も素晴らしいものがある、延々と風車が続く景色は壮観です。（1700基？）まさにインドの底力！という感じがします。



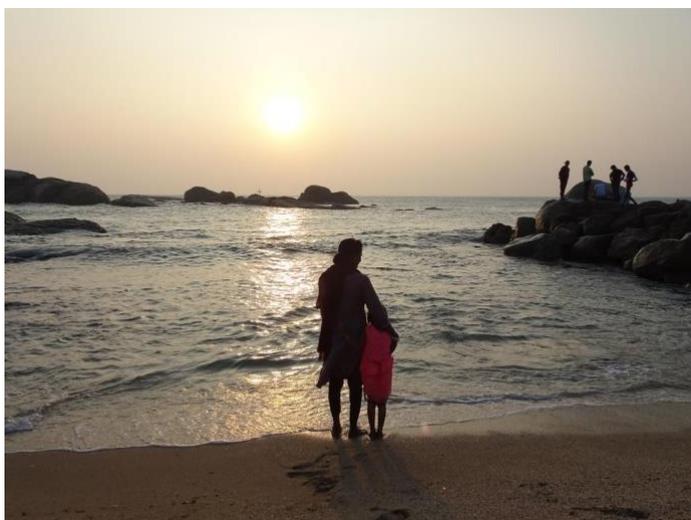
16:00カーニャクマリに到着。

カーニャクマリは太陽が海から昇り海に沈むインド唯一の場所で、ベンガル湾、インド洋、アラビア海がここで一つになります。カーニャクマリにあるコモリン岬はヒンドゥー教の聖地として有名で、多くの巡礼者が訪れます。「クマリ」とは、神話上の失われた大陸の名前とも、処女神の名前とも言われています。

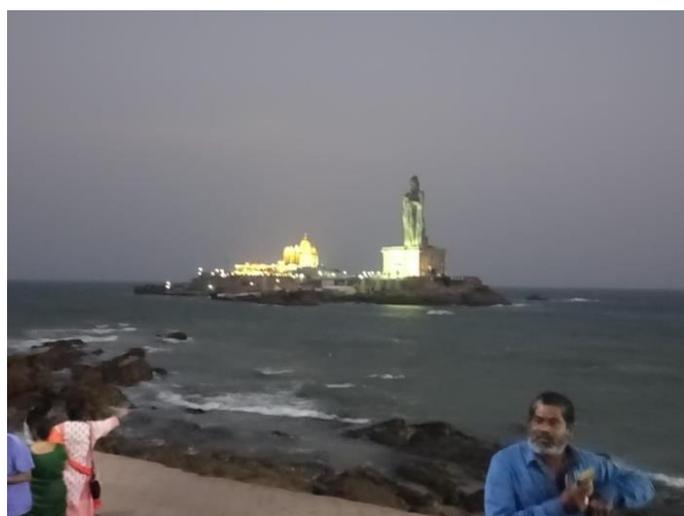
アラビア海に沈む太陽を眺めました。



夕日を見た後、街中を散歩し、夜店をのぞいてみると大勢の人が出ていました。



このコモリン岬にもガンディ記念堂があり、沖にはカーニャクマリの記念堂とティルヴァッルヴァル（タミール語の詩人）の像がライトアップされていました。



1日の観光を終え、シンガーインターナショナル・ホテルで宿泊。

5日目 ケーララへ

早朝、ホテルの屋上でベンガル湾から昇る朝日を見てから朝食をとった後、約250km、約6時間をかけて一路ケーララ州のトッタパリに向いました。

高速道路が建設途中で、バスは村の中をラリーのように凄いスピードで走り続けました。

ケーララ州は識字率が90%以上とインドで一番高く、伝統的に教育に力を入れているようで、治安が良いそうです。



バスはタミルナードゥ州からケーララ州に入り、町の看板の文字もケーララの言葉に変わりました。ドーティー（腰布）を巻いたおじさんもよく見かけました。

州都のティルヴァナンタプラムの土産物屋でトイレ休憩。イギリス統治時代の邸宅を改装したものですっきりした店構えでした。



ホテルのレストランで昼食。ガネーシャが迎えてくれました。

ガネーシャはシヴァとパールヴァティの息子で、商売と知恵の神で象の頭と大きな太鼓腹を持ち、ねずみに乗っています。

黒い布にくるまれたビールはいい雰囲気ですが中身はいつもの「キングフィッシャー」でした。「キングフィッシャー」はインド国内において最もシェアの高いビールだそうです。その後、バス移動の途中、ビールがよく効いて尿意を催し、青空トイレのために緊急停止をお願いするハメになりました。



◎ バックウォータークルーズ

トッタパリに到着後、お目当てのバックウォーター（海岸の内側に広がる水郷地帯）のクルーズが行われるアラップーラ（アレッピー）へまで行き、ケーララ州の南国的な風情を楽しみました。



香料を運んでいた舟を改造したボート1隻を4人で借り切って、料理人までついたクルーズはのんびりしていい気分です。

学校帰りの子どもたちがにこやかに手を振っています。



ボートを岸に着けて、田んぼに沈む夕日を眺め、舟に戻って夕食をとりました。
この辺りでは米が一年に3度とれます。北部インドと違って日本の米のようなもっちりした食感です。



ボートで一泊しますが、エアコン・水洗トイレ付きの個室ですのでぐっすり眠れました。
そして、翌朝、対岸から昇る朝日を眺め、小鳥のさえずりを聞いて、のんびりとした時間を過ごして大いに癒されました。
こんな優雅な舟遊びを満喫させてくれたケーララの人達に感謝しました。



朝食は餃子の皮のようなものでココナッツを包んだものや、パイナップルジャムなどソフトな味わいでした。

楽しかったクルーズも終わり、アレップーラで下船しました。



アラップーラで下船して、コチ（コーチン）に向い約1時間半後に到着しました。

途中、ココナッツウォーターを飲みましたが、あっさりした味でした。



6日目 コチ（コーチン）

コチはケーララに広がる水郷地帯の北端に位置し、古くから交易で潤い、フェニキア人やローマ人、アラブ商人などが訪れ、重要な港町として主に香料貿易で栄えてきました。

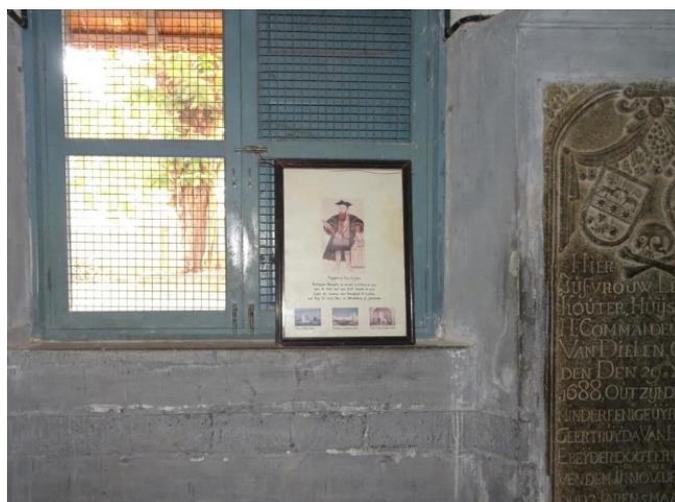
1503年、ポルトガルの植民地となり、その後、オランダ、イギリスなどの支配を受けましたが、現代のコチはインド有数の国際貿易港として発展しています。

◎ コチ市内観光

コチにはキリスト教徒が多く住んでいて、約50%はヒンドゥー教徒、約40%がキリスト教徒、約10%がイスラム教徒のようです。また、ヨーロッパからの観光客や留学生も多いということです。

聖フランシス教会はポルトガル時代にはカトリック、オランダ時代にはプロテスタント、イギリス時代には英国国教会、現在はインドのキリスト教会として使用されています。

この教会はヨーロッパ人が立てたインド最古の教会でヴァスコ・ダ・ガマの墓があります。
ヴァスコ・ダ・ガマは1524年にこの地で病死していますが、遺骨は死後14年経ってから長男がポルトガルに持ち帰りました。



フォートコーチンはポルトガル、オランダ、イギリスが支配した歴史を持つコーチンの中心地でコロニアルな建物が建ち並んでいます。



インドの伝統漁法チャイニーズフィッシングネットを見ました。
この漁法は中国から伝わり、数百年前からコチで続けられている伝統的な漁法で、インドではコチでしか見ることができないだそうです。
スパイスマーケットや民芸品店でショッピングも楽しみました。



軍隊の制服を洗濯してきたという歴史を持つ洗濯場を見してきました。
洗濯場に「躍るマハラジャ」の主役のラジニカーントの看板がありました。



コチは世界三大伝統医術の一つでオイルマッサージのようなアーユルヴェーダの発祥の地で、世界中のアーユルヴェーダセラピストが学びに来る聖地なんだそうです。
一応、私もアーユルヴェーダで癒されてきました。

◎ 南インドの伝統舞踊カタカリ

カタカリダンスはケーララ州を代表する民俗芸能で、緑色の隈取りがされた顔や、巨大なスカートを履いた衣装が特徴です。コチの街の至る所に「カタカリ」をモチーフにした絵やデザインを見ることができ、ケーララ州のシンボリックな存在となっています。
化粧をしていると顔の表情が随分変わってきます。カタカリは能や狂言に少し似ているパントマイムで、目や手の動きが面白いです。



物語は「ラーマーヤナ」や「マハーバーラタ」からとられているようで、村祭りの定番の出し物だそうです。
左が王子様、右が悪魔で美人に化けていますが、王子に見破られ胸と鼻を斬られて殺されるという芝居で、パントマイムの最後の所でギャーという叫び声を上げるところが面白いです。



7日目・8日目 デリーへそして成田へ

コチでの観光を終えて、アバドアトリウム・ホテルで一泊しました。

早朝、コーチン国際空港を出発して、AI0466 / エアバス A321 で空路デリーへ約3時間半のフライトの後、10:45デリーに到着。南インドを一周した後、振り出しのデリーに戻ってきました。デリーに着くとまたもや曇り。「やっぱりデリーの空気は汚染されているな」と思っていると、間もなく晴れてきました。ヒマラヤからの冷たい風によって霧が発生しやすいんだそうです。

到着後、まず昼食をとりました。久しぶりの日本料理が懐かしくほっとしました。

デリーのショッピングモールで買いものの後、インドの家庭でマサラティーをよばれました。

その後、デリー空港へ。21:15デリー発、AI0306 / ボーイング 787-8 で7時間15分のフライトで成田へ。

8日目の朝、無事成田に到着しました。



旅の終わりに

今回の旅行は出発までにツアーが成立するかどうかで随分気を揉まされましたが、結局、8名でツアーに出発しました。私は南インド旅行を熱望していたのですが、世の中の人達はそうでもないんでしょうね。

危ない・汚い・下痢しそう・見るものが何もないというような心配が先に立つのでしょうか。

私は「腹5分目」くらいで止め、下痢にもならず快調な旅でした。

南インドはちょっとゴミゴミしていますが、殆んど乞食にも出会わず、穏やかな人柄を実感しました。

寺院巡りが多い旅でしたが、インド人の宗教心が強いことを感じて癒されました。

南インドの地方都市は緑が多く自然も豊かで落ち着いた感じでした。

一年のうち一番過ごしやすい時期に旅行をしたせいか、のどかで落ち着いた感じでした。

住民の多くがドラヴィタ系の温和な人達だからかなとも感じました。

最後に、現地ガイドのネギさんの熱意溢れるサポートに心から感謝します。

